

南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会

所在地 静岡県静岡市葵区井川 964（井川観光会館内）



（アドバイザー派遣申請の背景）

明日の地域づくりのためのエコツーリズム

井川地区は、JR 静岡駅から 50 ㎞北に離れた自然豊かな山間地域で、南アルプスの麓としても市民に親しまれています。昭和 30 年代にはダム建設により人口は 8,400 人にまで増加しましたが、ダム建設が終わるとその人口は激減し、平成 23 年 9 月末現在、599 人（331 世帯）にまで落ち込み、過疎化、高齢化が進んでいます。

こうしたなか、「小さなことからでも、まずは始めてみよう！」の精神で、平成 20 年 7 月、この地に地元住民主体による「南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会」が立ち上がりました。

地域内には社会教育施設などもあり、小中学校の野外教育活動が盛んな場所でもありますので、設立当初から学校教育と連携したエコツーリズムに取り組んでいます。

その一方、立ち上げ当時から一般向けのプログラム開発とその提供に課題を抱えています。協議会としても、地域の観光協会や旅館・民宿組合などと連携したプログラムを開発したい思いもありますが、遠隔地のため、人材の確保が難しく、団体同士の連携も十分に図られていない現状です。

こうした経緯もあり、改善期を迎えている組織に少し新しい風を送り込みたいと考え、今回の環境省エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業への参加を希望しました。

このたび、派遣地域の選定を受けて、私たち協議会では、①地域みんなで「よし、やろうよ！」と思える意識啓発に繋げていくこと、②地域の観光資源を見つめ直すことによってそこから生まれる新しいエコツーリズム（観光）のあり方を発見すること、③他の地域の活動事例を交えた活動の評価と今後の方向性。この 3 つの目的意識をもって取り組みたいと考えました。

エコツーリズムに取り組む目的	
従来の観光から脱して、新しい地域の魅力づくりを行うため	○
「自然とのふれあい」を志向する旅行者のニーズに対応するため	○
地域の活性化に貢献するため	○
地域資源の保全に対して「来訪者」の意識を高めるため	
地域資源の保全に対して「地元住民」の意識を高めるため	
地域の将来にわたって「自然環境や文化の保全」が特に重要な点だと考えているため	○
現在悪化しつつある地域の自然環境や文化の保全に役立てるため	
(その他)	

エコツーリズムの対象となる自然観光資源	
動植物	○
動植物の生息地・生育地	○
地形・地質	○
自然環境と密接な関連を有する風俗習慣、その他の伝統的な生活文化に係る観光資源	○
これから地域資源の洗い出しをするため、地域資源の把握ができていない	
(主な自然観光資源)	

現在取り組んでいる・取り組もうとしているエコツアーの種類	取組中	検討中
原生的な自然におけるエコツアー	○	
地域に特有な野生生物とのふれあい		○
自然の営みにふれる観察会への参加		○
地球科学的な視点から自然や暮らしとの関わりを学ぶ活動		○
環境教育を主目的とした活動		○
農林業などの体験を通じて自然への理解を深める活動		○
自然や文化に関する解説を受けながら地域を巡る活動	○	
地域の生活や文化を体験する活動	○	
環境保全のための貢献活動		○
自然の中でゆったりとした時を過ごしながらか自然の恵みを体感する活動		○
(現在取り組んでいること)		
(取組を検討していること)		

(アドバイザー派遣を実施して参考になったこと、感想)

アドバイザー派遣の概要

●日時

平成 24 年 3 月 12 日 (月) ～13 日 (火)

●場所

静岡県静岡市葵区井川 (井川観光会館、静岡市役所葵区井川支所 他)

●エコツーリズム推進アドバイザー

文教大学 国際学部 国際観光学科 准教授 海津ゆりえ 氏

●参加者

南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会、井川振興会、井川観光協会、井川森林組合、リバ
ウエル井川運営組合、井川旅館組合、井川民宿組合、企業組合らいちょう、井川農林産物加工所 (ア
ルプスの里)、NPO 法人大日倶楽部、静岡市環境局環境創造部清流の都創造課、静岡市経済局農林
水産部中山間地振興課、静岡市教育委員会事務局教育部教育総務課 (井川少年自然の家)、静岡市葵
区井川支所 合計 30 名

●視察およびアドバイスのスケジュール・方法

観光資源として大井川鐵道 (蒸気機関車・アプト式鐵道) の乗車視察を行うとともに、地域内で
実施している取組 (歴史探訪、つる細工、リース・苔玉づくり、そば打ち体験、雑穀食文化) を実
際に見ていただきながら、地域資源の活用のあり方などに対して助言をいただく。また、今後のエ
コツーリズムへの取組、コミュニティ・ベースのエコツーリズムの推進についても助言をいただく。

(1 日目)

大井川鐵道 (蒸気機関車・アプト式鐵道) の乗車視察
意見交流会

(2 日目)

井川本村地区内歴史探訪 (中野観音堂：千手観音立像)
里山文化 (つる細工、リース・苔玉づくり、そば打ち体験)
伝統工芸 (井川メンパ)
食文化体験 (雑穀、ヤマメ、鹿肉、地の食材)
全体研修会

(アドバイザー派遣を実施して参考になったこと、感想)

アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

まずは、海津先生を迎えるにあたり、「井川の食文化をいかにして伝えようか。」について考えた。井川の人間はみんな温かいおもてなしの心を持っている。新しい何かを考えることも大切だが、「いつもどおり、普段着のまま、お迎えしよう。」と考えて準備した。打ちたての蕎麦やヤマメの塩焼き、鹿汁などのメニューに加え、雑穀ご飯や家庭から持ち寄った漬物や煮物、自家製味噌などが食卓を彩った。こうした試みの結果は、この後の海津先生の講義のなかで、ある地域の成功例となった「みんなで確かめ合うプログラムづくり」としてご紹介いただいた。

井川地域に観光客を招くための最大の課題は交通アクセスである。静岡市内から井川へと通ずる主要の県道は、今年の台風で崩壊し、今も不通となっている。このため、海津先生には観光資源としての視察を兼ねて、大井川鐵道をご利用いただいた。JR 金谷駅から大井川鐵道に乗り換え、最大の魅力である蒸気機関車とアプト式鐵道を乗り継いで井川へお越しいただいた。乗り換えの待ち時間を含めると約3時間45分の鐵道旅である。この移動に係る時間を、私たちはついもったいないと感じてしまうが、海津先生は「井川の道は南アルプス手前で行き止まりです。それは目的意識を持って井川に来る人を迎えらるということにも繋がります。」という逆の発想であった。道路や交通手段の整った地域では、通過型からの脱却、滞在型の推奨に取り組むところも多いことを伺った。不便さという観光の不利的条件を、逆にどう活かすかという発想は、これまでにない新鮮な情報として受け止めることができた。

井川地域の懸案事項である地域の活性化について、海津先生から「地域が100あるとしたらそこには100通りの違う現状があります。エコツーリズムをやらなければと頑張るまえに、地域にあるものをいかにして将来へと伝えていくことができるのか…。そのためのエコツーリズムや観光であってほしい。」と助言いただいた。また、コミュニティの再生は地域活性化の一步でもあり、コミュニティを動かすためには、協働で何かをする、地域を見つめ直す、外からの情報に耳を傾ける。そのためのツールとして地域の観光やお祭りがあることの助言もいただいた。あらためて、地域行事の大切さについて考える機



会となった。

観光の5つの力（経済、教育、健康、交流、文化）について紹介があった。この力はエコツーリズムにも共通して使える旅のニーズであることを伺った。エコツーリズムとは「守り伝えたいものを掘り起こして伝えて、地域の糧となる活動」と定義された。井川地域では後継者の育成に悩んでいる。地域の宝（観光資源）を次世代へと受け継ぐための取組もしていかなければならない。

そのためには地域、行政、研究者、専門家、旅行業者等が連携し、エコツーリズムやコミュニティの基盤づくりを進めていくことの助言をいただいた。

●今後の期待される効果

エコツーリズムは、その地域の生活と密接に繋がっているものであることを再認識することができた。改善期を迎え、エコツーリズムの今後の方向性について悩んでいたが、海津先生の助言を受けて、新しさを求めることも大事であるが、まずは今あるものをどう活かしていくのかを考え、それをエコツーリズムに繋げていくことを確認し合えた。

南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会の他、地域関係団体や NPO 法人、行政関係課にも参加をいただき、井川地域の抱える問題全般と向き合う機会となった。今後もこうした交流の機会を持続しながら、地域活性化の基盤づくりを進めていきたい。



中野観音堂 千手観音立像
(静岡県指定文化財：平成 17 年 11 月 29 日)



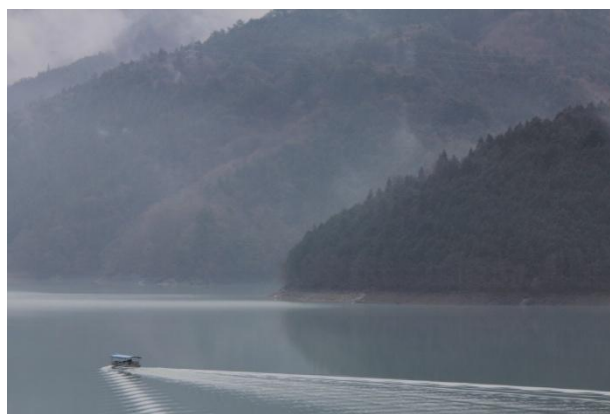
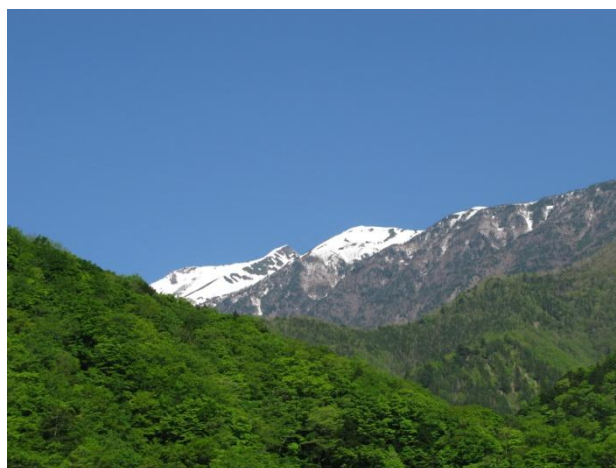
井川湖
(静岡市営リバウエル井川スキー場より)

(アドバイザー派遣を実施して参考になったこと、感想)

アドバイザー派遣を実施して (地域からの声)

静岡市を含む南アルプスに深く関係する山梨、長野、静岡3県10市町村では、平成19年2月、南アルプス世界自然遺産登録推進協議会を設立し、南アルプスの世界自然遺産登録を目指し取り組んでいます。平成23年度、南アルプス世界自然遺産登録推進協議会では、南アルプスの生態系・生物多様性の価値を磨くため、世界遺産と同じユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の人間と生物圏(MAB: Man and Biosphere)計画のもとで承認される生物圏保存地域(BR: Biosphere Reserves<国内呼称: ユネスコエコパーク>)への登録を目指し検討を進めています。ユネスコエコパークは、地域での乱雑な開発によって自然環境が壊滅されないよう、絶対に守らなければならない区域(核心地域)、教育活動などに活用ができる区域(緩衝地帯)、経済活動の基盤となる居住区域(移行地域)を明確にすることで、その自然環境を保全しようとする制度です。このようにユネスコエコパークは、自然と人間と

の共生社会の実現を目指し、自然環境の保全と利用の調和を図ろうとする国際的な取組として、平成23年7月現在、世界114カ国、580地域で登録されています。また、この制度の概念は、海津先生の講義のなかで説明のありました日本型(アジア型)エコツーリズムの考え方とよく似ていると思います。自然の守り方を一番よく知っている地域の人々の生活圏を巻き込んで、その地域の活性化により守るべきところは守り、そして活用できるところは活用していきましょうという考え方で、このため、この区域内では核心地域を守りながら、観光やエコツーリズムなどを推進し、環境教育の普及や保全対策に取り組む活動が求められます。今回、アドバイザー派遣事業に選定いただきました井川地域は、まさにこの制度の想定区域内に位置しており、古くから南アルプスの山々とともに共生し、育まれてきた生活文化を継承している地域です。このようにユネスコエコパークを進めるうえで井川地域は重要な位置づけとなっていること、また、地域資源をユネスコエコパークのなかで活用していくためにも、井川地域のコミュニティ再生と経済活動の発展に向けて取り組んでいく必要があります。海津先生には、井川地域におけるこれからの交流推進基盤づくりに向けて、さまざまな地域の取組事例を交えながら助言をいただきました。これからもそれぞれの立場で各々が関わりと役割を保ちながら、点を線で繋げていくための活動を行っていきたいと思います。



(エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス)

海津アドバイザーからの地域へのアドバイス

●交流会

主として井川地域の課題と希望について出席者より挙げてもらった。その結果、井川地区の自然や文化の豊かさ、伝えていきたいものの豊富さは誰もが誇りをもって感じており、それがエコツーリズム推進の原動力であることが明らかとなった。一方で課題（と感じていること）が山積していることも明らかとなった。それらは、

- ・ 交通条件の不利：山麓に向かう鉄道・道路の終着地であり通過交通がない
- ・ ダム工事の終結による人口の減少と高齢化
- ・ 雇用先の不足、住宅不足によるU I J ターンの受け入れ困難
- ・ 上記によるコミュニティ存続の危機

等であり、現在の日本の多くの中山間地域が直面している課題であった。

●研修会

研修会は上記課題群の共有から始めた。その上で、

井川地区の資源の豊かさを再認識すること

制約条件や直面している課題を冷静に踏まえて逆転の発想でプラスに転じること

限られた担い手人材であることからパートナーシップによる連携を図ること

ターゲットの絞り込みを戦略的に行い、効果的な活動を行うこと

等の重要性をアピールした。人口問題の解決は、エコツーリズムのみでは難しい。産業興しや特産品開発など、地域づくり全体の課題として取り組む必要があると思われる。

研修会に先立つプログラム体験の折に感じた井川の人々のホスピタリティと教え上手なことなどを踏まえ、滞在型プログラムの実施、宝探しとエコウォークの実施、静岡市内の都市部との連携による学校教育へのアプローチ等を提案した。

●全体的なコメント

井川地区は後背に南アルプスを抱く奥まった土地にあることから、自然・生活文化・歴史等のあらゆる面において、凝縮された資源をもつ土地柄である。大井川の上流域に位置し、かつては紀伊国屋文左衛門が山を所有し、街道も通っていたことから物流や商業にも関わりがあり、それが奥地ながら外に対して開かれた気風につながっているようであった。資源の豊かさは様々な物語を生み、住民に住む誇りを与えているようである。

出会った方々は誰もが勉強熱心で、資源についてよく調べており、かつ初心者にもわかるように説明する技術は年齢・性別・立場を問わず一貫した井川人の特徴であった。このことは井川地区のエコツーリズムに方向性を与えるものであろう。

交通の不利条件が多数の方から上がったが、離島等に比べれば条件は良い方である。「それでも井川に行く」という理由をどのように作るかがカギであると感じたが、限られた受入体制の中での活

動を考える限りにおいては、上限の集客数はさほど大きなものではないはずである。台風等に対して脆弱な車道を心配するのであれば、大井川鐵道をうまく活用し、移動もエコツアーに組み込むような方策が考えられないだろうか。

研修会のディスカッションで少々気になったこととして、複数団体間のコミュニケーションの問題がある。様々な経緯で諸団体が発生したと思うが、プロジェクトを立てて協働で取り組むなど、外側（市等）のサポートにより、連携の利点を活用できるようにするべきであろう。

2日目の朝からご用意くださった体験は、どれも心と地域自慢がぎっしりと詰まり、楽しくかつ忘れられないものとなった。あの観光会館前の広場で展開された、文化と食体験のピクニックのような賑わいは、一つの祭りのようであった。美味しく・楽しく・学んだ。いろいろと教えていただいたが、皆さん（とくに女性たち！）の指導力はインパクトがあった。楽しさは参加した人々に共有されたのではないかと思う。あのピクニックだけでも十分な魅力があり、井川に来てよかったと思えるものであった。大学や小中学校との定期的な交流等を通じて、里帰りのようなエコツアーリズム体験の場にできるとよいのではないかと感じる。

資源は豊富にあり、人材もいる。地域の総合力で来訪者を迎え、他の過疎化する地域への励みとなるようなエコツアーリズム推進地域になっていただきたい。ありがとうございました。